

筑後川下流左岸農地防災事業にかかる 環境配慮計画について



～保 全 対 象 種 編～

九州農政局
筑後川下流左岸農地防災事業所

事業概要

本地区は、有明海に面した筑紫平野のうち、筑後川の下流左岸地域に広がる水田約 5,400ha の全国有数の農業地帯であり、稲作を中心に水田の畑利用による野菜作等（麦類、大豆、いちご等）を組み合わせた複合経営が展開されています。

しかし、本地区のクリークは、法面の崩壊が進行しており、クリーク沿いの道路等の損壊が発生するとともに、土砂の堆積による排水機能低下から農地等に広域的な災害が発生する恐れがあります。

このため、本事業により、クリーク法面の保護整備を行い、これらの被害を未然に防止するとともに、農業生産の維持及び安定を図り、併せて国土の保全を図るものです。

本地区に生息する保全対象生物について

１． 工事実施地区の生息する保全対象種について

本地区には、アサザ、ニホンウナギ、カネヒラ、ヤリタナゴ、カゼトゲタナゴ、セボシタビラ、ニッポンバラタナゴ、ミナミメダカ、ミズゴマツボ、クルマヒラマキガイ、ニセマツカサガイ、マツカサガイ、トンガリササノハガイ、ベンケイガニが環境省及び福岡県のレッドデータブックに記載されています。また、地域において生態系の構造的特徴を表す「典型性」を有する種クサガメ等が生息しています。

保全対象種の選定については、環境省及び福岡県のレッドデータブックに記載されている種を選定しています。また、現地調査した種の中から地域生態系の指標性（上位性、典型性、特殊性、希少性）及びなじみのある種を抽出し、注目すべき種を選定しています。

さらに注目すべき種から、事業による影響が小さいと考えられる種を除き、クリークへの依存、施工時の影響（施設運搬、地盤改良等）及び供用時の影響（地形変化、植生変化等）を考慮し、保全対象種 21 種 1 類（植物：1 種、魚類：9 種、底生生物：9 種、昆虫類：1 種、爬虫類：2 種）を選定しています。これらの種は、生態系に重要な種であることから、保護を必要とされています。

☐ 植 物	アサザ
☐ 魚 類	ニホンウナギ、カネヒラ、ヤリタナゴ、カゼトゲタナゴ、セボシタビラ、ニッポンバラタナゴ、ミナミメダカ、ナマズ、トウヨシノボリ
☐ 底生生物	ミズゴマツボ、ヒラマキミズマイマイ、クルマヒラマキガイ、ドブガイ、ニセマツカサガイ、マツカサガイ、トンガリササノハガイ、イシガイ、ベンケイガニ
☐ 昆 虫 類	トンボ類
☐ 爬 虫 類	クサガメ、スッポン

～本地区に生息する保全対象種の紹介～

アサザ（ミツガシワ科）



希少性
絶滅危惧ⅠA類
(福岡県)
準絶滅危惧
(環境省)

・生態等

池や流れが緩やかな川、水路に生育する。近年、水辺の護岸工事や水質汚濁、水位操作に伴い、各地で個体群が消滅、縮小している。浮葉性植物で、地下茎をのばして生長する。スイレンに似た切れ込みのある浮葉をつける。初夏から9月頃まで直径3～4㌢の黄色い花を咲かせる。

カネヒラ（コイ目コイ科）



希少性
準絶滅危惧
(福岡県)

・生態等

県内では筑後川中流域が主な産地であり、成魚は水草の生えた流れのあるところに好んで生息する。産卵やその他の条件で広範囲に移動する。繁殖の最盛期は秋で、用水路、緩流域にすむ二枚貝に産卵する。貝の中での成長は遅く貝をでるのは翌年の5月以降となる。稚魚は止流域に集まる。成魚は付着藻類を食べている姿をよく見かける。

ニホンウナギ（ウナギ目ウナギ科）



希少性
絶滅危惧ⅠB類(福岡県)
絶滅危惧ⅠB類(環境省)

・生態等

湖・池沼・河川・湾内に分布し、河川域では、水源付近から、河口域付近まで広く生息する。中・下流域に多い。淡水で5～12年を経た後、8～10月に川を下って、産卵場へ向かう。産卵は5～6月の新月にフィリピン諸島とマリアナ諸島の間で行われる。シラスウナギの遡上期は、10～6月で、盛期は、1～3月。動植物性で、小魚・エビ・カニ・貝類・水生昆虫・カエル類などを食べる

ヤリタナゴ（コイ目コイ科）



希少性
絶滅危惧Ⅱ類(福岡県)
準絶滅危惧
(環境省)

・生態等

河川の中流から下流、湖沼、用水路などに生息する。産卵期は4～8月で、用水路、緩流域にすむ二枚貝に産卵する。稚魚は動植物プランクトンを、成魚は水草に付着する動植物、特に付着藻類を食べる。

カゼトゲタナゴ（コイ目コイ科）



希少性
絶滅危惧ⅠB類
(福岡県)
絶滅危惧ⅠB類
(環境省)

・生態等

九州北西部のみに分布する（球磨川水系流藻川が南限）。流れの穏やかな水の澄んだ砂～砂泥底の細流や浅い水路に生息する。産卵期は3～6月で、卵はマツカサガイ・イシガイの体内へ産みつける。雑食性で、水生昆虫や付着藻類を食べる。

ニッポンバラタナゴ（コイ目コイ科）



希少性
絶滅危惧ⅠB類
(福岡県)
絶滅危惧ⅠA類
(環境省)

・生態等

平野部の河川やクリーク、灌漑用水路、池沼などにすむ。産卵期は4～9月で雌がドブガイやイシガイなどの出水管に産卵管を入れて貝の鰓に卵を産み付ける。砂泥底や泥底を好み雑食性。

セボシタビラ（コイ目コイ科）



希少性
絶滅危惧ⅠA類
(福岡県)
絶滅危惧ⅠA類
(環境省)

・生態等

オオカナダモなどの水草の繁茂する比較的水のきれいな小河川や水路に生息する。九州固有種。成魚は比較的流れの速い、石や杭などのあるところを好む。稚魚や未成魚は静水域に集合するなど産卵活動や成長に伴う水域内での移動が想定される。産卵は2月下旬～夏場まで続き、マツカサガイ、ドブガイなどの二枚貝の鰓に産みつける。

ミナミメダカ（ダツ目メダカ科）



希少性
準絶滅危惧
(福岡県)
絶滅危惧Ⅱ類
(環境省)

・生態等

止水域及び流れの緩やかな場所に生息する。産卵は5～6月、9～10月がピークとなり、水田や用水路の藻や水草に産む。稚魚はプランクトン類を、成魚は雑食でイトミミズ、水生昆虫、動植物プランクトンを食べる。

～本地区に生息する保全対象種の紹介～

ナマズ（ナマズ目ナマズ科） トウヨシノボリ（スズキ目ハゼ科）



指標性
(典型性)

・生態等

河川の中・下流域、水田・周辺水路に生息する。産卵期は8月で梅雨時の真夜中に水田や用水路に群れをなして集まり、水面に浮いている藻や水草に産卵する。稚魚は半底生性の浮遊動物や小型の底生動物を、成魚は小魚、カエル、甲殻類、貝類を食べる。



指標性
(二枚貝幼生の宿主)

・生態等

トウヨシノボリは、河川上流から下流域に分布する。石や礫が皆無で汚濁の進んだ水域にも多く、泥の塊にも産卵する。またトウヨシノボリ類は二枚貝の幼生（グロキディウム幼生）が鰓や体表に多く寄生し、二枚貝の分布拡大に貢献している。

ミズゴマツボ (吸腔目ミズゴマツボ科)



希少性
準絶滅危惧
(福岡県)
絶滅危惧Ⅱ類
(環境省)

・生態等

ミズゴマツボは、汽水域のヨシ帯やそこに連続するであろう純淡水域の水田地帯の水路に生息する。

ヒラマキミズマイマイ (モノアラガイ目ヒラマキガイ科)



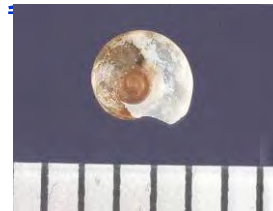
希少性
情報不足
(福岡県)
情報不足
(環境省)

・生態等

直径5mmほどの円盤型の巻き貝。黄褐色から茶褐色の半透明で、触覚はひも状。水田や水路などの止水環境に多くみられる。水生植物や礫などに付着し、これらの表面を這い回って生活する。寒天質の卵塊を水生植物の葉や茎に産みつける。

～本地区に生息する保全対象種の紹介～

クルマヒラマキガイ (モノアラガイ目ヒラマキガイ科)



希少性
絶滅危惧Ⅱ類
(福岡県)
絶滅危惧Ⅱ類
(環境省)

・生態等

河川、クリーク、細流、池沼、水田などに普通に棲む。池や水田などの水生植物や礫などに付着し、これらの表面を這い回って生活する。ときどき水面に出て肺に酸素を取り込む。繁殖期は5～8月で、卵はゼラチン質の卵塊として水草などに産みつけられる。主に植食性で、微細な藻類をやすりのような歯舌で削り取って摂餌する。

ニセマツカサガイ (イシガイ目イシガイ科)



希少性
絶滅危惧ⅠB類
(福岡県)
絶滅危惧Ⅱ類
(環境省)

・生態等

小川や用水路などの礫や砂泥底に生息する。殻長50mm程度で殻はやや厚く殻皮は黒い。外形、彫刻などはマツカサガイに酷似するが、後端が円く、わずかにくぼむ。ろ過食性で、水中の浮遊懸濁物質や微細藻類を鰓で濾し取って摂餌する。淡水魚のタナゴ類やヒガイなどの産卵の場として重要である。

ドブガイ (イシガイ目イシガイ科)



指標性
(典型性)

・生態等

潟、池、川、水田などの浅水域の泥底や砂泥底のところに生息し、陽の当たる泥底に多い。通常、砂泥中に殻を半分差し込み、群れをなして生息する。ろ過食性で、水中の浮遊懸濁物質や微細藻類を鰓で濾し取って摂餌する。淡水魚のタナゴ類やヒガイなどの産卵の場として重要である。これらの魚類は淡水産二枚貝の体内に卵を産みつける。

マツカサガイ (イシガイ目イシガイ科)



希少性
絶滅危惧Ⅱ類
(福岡県)
準絶滅危惧
(環境省)

・生態等

小川や水路の砂や砂泥底に生息する。殻表には波状の彫刻があり、殻の長さは60mmの中型卵円形で、80mmを超える個体もある。ろ過食性で、水中の浮遊懸濁物質や微細藻類を鰓で濾し取って摂餌する。淡水魚のタナゴ類やヒガイなどの産卵の場として重要である。

～本地区に生息する保全対象種の紹介～

トンガリササノハガイ (イシガイ目イシガイ科)



希少性
絶滅危惧Ⅱ
類
(福岡県)
準絶滅危惧

・生態等

トンガリササノハガイは、河川や池沼の砂泥底に生息する。ろ過食性で水中の浮遊懸濁物質や微細藻類を鰓で濾しとって摂餌する。

ベンケイガニ (十脚目イワガニ科)



希少性
絶滅危惧Ⅰ
類

・生態等

河口部の干潟後背地の土手や湿地、草原、水田などに生息する。夏季を中心に活動し、気温が20℃以下になると巣穴に潜って越冬体勢に入る。繁殖期は7～9月頃で、孵化まで約1か月間抱卵する。孵化が近付くと雌は河岸や海岸に移動して水中に入り、孵化と同時にゾエア幼生を水中に放出する。動植物を中心とした雑食性であるが、成体は陸上の農作物も食い荒らす。

イシガイ (イシガイ目イシガイ科)



指標性
(典型性)

・生態等

河川や湖沼の水の清らかな砂礫底にすむが、ある程度富栄養化した水域でも生息することができる。通常、砂の中に殻を半分差込、群れをなして生息する。ろ過食性で、水中の浮遊懸濁物質やプランクトンを入水官から吸い込んで摂餌する。淡水魚のタナゴ類やヒガイなどの産卵の場として重要である。これらの魚類は淡水産二枚貝の体内に卵を産みつける。

～本地区に生息する保全対象種の紹介～

クサガメ (カメ目イシガメ)



指標性
(典型性)

・生態等

低地の流れの緩やかな河川や湖沼及びその周辺に生息する。水辺近くの土中に産卵し水中で冬眠する。雑食性で甲殻類や巻き貝を好んで食べる。日光浴を好む。近年ミシシippアカミミガメとの競合で特に平野部で生息数が減少している。

スッポン (カメ目スッポン)

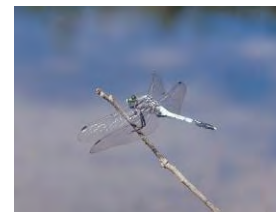


希少性
情報不足
(福岡県)
情報不足
(環境省)

・生態等

底が砂泥質の流れの緩やかな水路などに生息する。昼行性でよく砂泥の中に潜る。日光浴を好む。産卵は5～8月頃。貝類、甲殻類、水生昆虫、両生類などの動物質を主に食べる。

トンボ類



指標性
(典型性)

・生態等

抽水植物の生育する流れのない湖沼や水田などに生息するトンボ類である。種により抽水植物の利用の仕方が異なる。台湾ウチヤンマのように植物体上に静止してなわばりの監視を行うものや、イトトンボ類は植物体内に産卵する。

セスジイトトンボ・アジイトトンボ・アオモンイトトンボ・ウチヤンマ・台湾ウチヤンマ・ギンヤンマ・オオヤマトンボ・ショウジョウトンボ・コフキトンボ・シオカラトンボ・ウスバキトンボ

～用語の説明～

絶滅危惧Ⅰ類：絶滅の危機に瀕している種。現在、絶滅の危険性が極めて高いもの。

絶滅危惧ⅠA類：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。

絶滅危惧ⅠB類：ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。

絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危機が増大している種。現在、絶滅の危険性が比較的高いもの。

準絶滅危惧：現時点での絶滅危険度はⅡ類以下であるが、将来の環境条件の変化により、絶滅の危険性が高くなる可能性がある種。

情報不足：評価するための情報が不足している種。

保全対象種と

について

法面保護工

1:2.0 ガメ

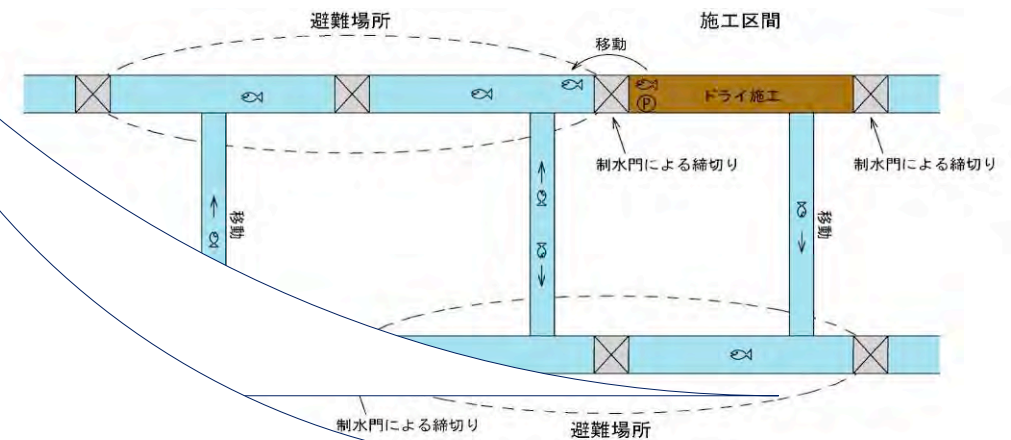
工事関係及び周辺住民の皆さんへ

～保全対象種の取り扱いに関するお願い～

1. 本事業は下記のとおり、保全対象種及び周辺環境への配慮を行い、工事施工を行うこととしておりますので、配慮をお願いします。

1) 生物の生息・生育環境への配慮

- ・資材置場や工事範囲を最小限にし、動植物への影響を最小限に抑える。
- ・魚類の避難場所を確保するため、長大区間や連続施工を避けた施工を行う。
- ・工事の実施は、冬期を中心に行う（鳥類の繁殖期、魚類の産卵期を避ける）。
- ・施工範囲に移植や移動等が必要な種が確認された場合は、類似した環境適地への移植、移動等を行う。



凡例

：施工範囲

2) 周辺環境への配慮

- ・工事で使用する重機は、低騒音型、低振動型、排出ガス対策型のものとする。
- ・散水を行う等により、砂塵対策を行うものとする。

3) 水質保全に対する配慮

- ・工事中の土砂、濁水を抑制するため、濁水流出防止対策を行うものとする。

4) 廃棄物の低減に対する配慮

- ・コスト縮減となるリサイクル方法を検討し、再資源化、縮減に努める。
- ・建設発生土等は、できる限り現場内で再利用するものとする。

5) 施工管理

- ・工事関係者の方は、2)～4)を徹底して下さい。

参考資料

レッドリスト 環境省

「福岡県の希少野生生物ー福岡県レッドデータブック」 福岡県

環境配慮パンフレット

発行 農林水産省 九州農政局 筑後川下流左岸農地防災事業所

〒830-0061 福岡県久留米市津福今町 472-31

TEL : 0942-38-4326